

みやのこしいせき
宮之腰遺跡発掘調査現場説明会

R7.5.24(土)

宮之腰遺跡の概要



図1 宮之腰遺跡位置



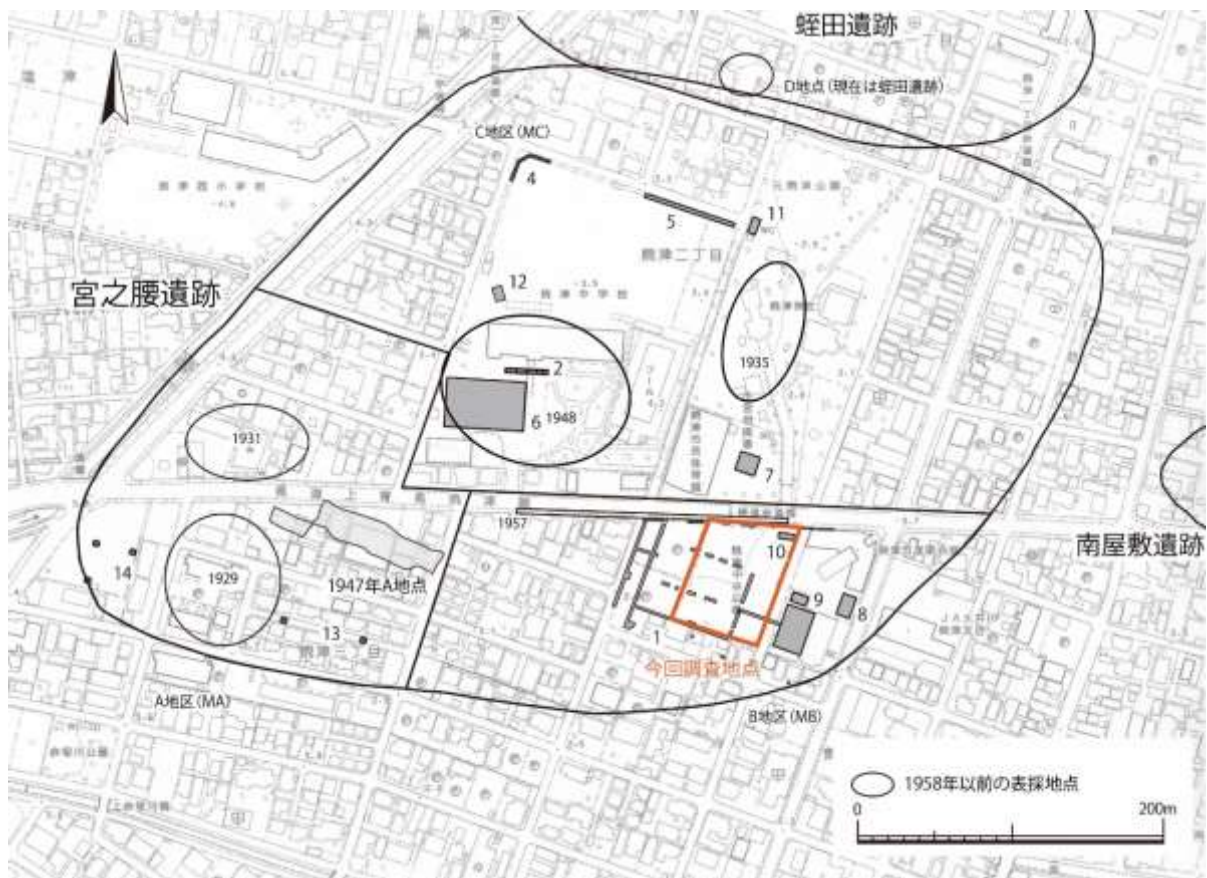
写真1 昭和55年の調査で発見された建物跡



写真2 火事で焼け落ちた建物跡

焼津神社周辺では、昭和の初めごろからたびたび古い土器が見つかっていました。昭和33年（1958）に初めて発掘調査が行われ、約1500年前の古墳時代、この付近一帯には大きな集落があったことが分かりました。そしてこのあたりの古い地名（小字名）から「宮之腰遺跡」と名付けられました。

現在までに15回におよぶ発掘調査が行われ、^{たてあなじゅうきょあと}竪穴住居跡、^{ほったてばしらたてものあと}掘立柱建物跡（倉庫跡か）、



▲ これまでの宮之腰遺跡発掘調査地点

さいしあと
井戸跡や祭祀跡などたくさんの生活の痕跡が見つっています。これらの遺構からは土器を中心とした遺物しゅつぶつが出土しており、その量は市内で1、2を争うほどのもので、遺跡から出土した土器は、「宮之腰式」と呼ばれ、当時の年代の指標となっています。

昭和55年（1980）の焼津中学校の体育館建設に伴う発掘調査では、火事で焼け落ちた1棟の住居跡が発見されました（写真2）。この住居は、縦横に組んだ細い丸木に葦あしを葺ふいた壁を持つものであったことが分かり、当時の住居の構造を示す貴重な発見となりました。

また、この住居跡からは食事用のわん碗や調理用の容器などの土器や、珍しいものとして草履ぞうり（またはわらじ）がそのままの形で出土しています。これは、当時の人々の生活スタイルを考える上で大切な資料となっています。

このほか、平成21年（2009）の調査では、多くの土器が1カ所からまとまって見つかった。

ています。これらの土器の中や下からたくさんの玉類^{たまるい}も一緒に見つかり、周りの土が焼けていることなどから、何らかのおまつりが行われたと考えられます。こうした結果から、宮之腰遺跡は古墳時代の人々の生活や社会を知る上で重要な遺跡として知られています。

今回の調査で分かったこと

発掘調査では、古墳時代中頃（今から 1450 年～1500 年前）の土器のまとまりが何カ所かで見つかりました。これらの土器は、後世に行われた開墾等によって一部を失っているものもありますが、大部分がほぼ完全なかたちをなしていたと考えられます。また、土器の中には重ねて置かれたものもみられることから単なる土器のゴミ捨て場ではなく、意図的に形成された土器のまとまりであると考えられます（考古学ではこれを土器集積^{ど きしゅうせき}と呼んだりします）。さらに、この土器のまとまりからは、当時としては非常に貴重な滑石^{かつせき}というやわらかい石を用いてつくった玉（ビーズ）などがみつかったことから、何らかのおまつりが執り行われた跡と考えられます。

これまでに、平成 21 年（2009）の調査で、土器の一群が発見され、何らかのおまつりを行った跡とされていますが、今回発見された土器のまとまりは、土器の数が比較的少なく、意図的に配置したと考えられる土器のまとまりが、何カ所か点在して見つっています。

今後、出土した土器の詳細を観察していかなければいけません、大規模なおまつり以外に、コンパクトなおまつりを行っていて、おまつりも何種類かあったのではないかと予測することができます。

また、今回の調査では竪穴住居などの建物跡が発見されませんでした。調査では、地形が

南東に向かって低くなっていること、調査区の一部から、流路跡が見つかったことから、集落の中心は、県道より北側の焼津中学校から焼津神社周辺に広がっていたことが想定され、今回の調査地点周辺は集落の縁辺部であったということが出来ます。

1500 年前に何が行われていたの？

執り行われたおまつりの内容については想像の域を出ませんが、用いられた土器、貴重な石の玉などから、集落の境付近で何らかのおまつりを何回もやっていた可能性が考えられます。

この場で何が行われたか、これはなかなか解ける問題ではありませんが、埴形の土器を多数用い、そのほかに煮炊きや液体の貯蔵に使ったと思われる甕・^{かめ}壺^{つぼ}なども出土していること、明らかに人為的に土器を並べていることが大きなヒントになると考えられます。現在も村々で行われているお祭りでは、神への奉事と祭礼のあとの^{なおり}直会がともに行われています。おそらく当時のおまつりもこうした神への祈りと、共に飲み共に食べる儀式が行われていたことと思われます。

会場では、これらの土器の一部と玉類の一部を展示しています。赤茶けた色もしくは肌色の素焼きの土器は^{はじき}土師器という一般的な土器で埴^{つき}（坏）、高^{たかつき}坏、壺、甕などの形があります。今回見つかった土器のほとんどはこの土師器です。そのほか土師器に混じって、^{すえき}須恵器という灰色もしくは青灰色の朝鮮半島から技術が伝来した土器がごく少量見つかっています。須恵器は、その当時日本列島各地での生産が始まった最新の土器で、埴^{つき}（坏）のほか、はそう（甕）というお酒などを注ぐのに用いられた土器も見つかっています。



写真3 A1 調査区全景（上空から）



写真4 調査区と焼津神社、焼津中学校（南東から）



写真6 A1 調査区で出土した土器集積（SX09）



写真6 T2 調査区で出土した土器集積（SX05）